

薪神楽

武州みたけ

第四十三号

## 就任のご挨拶

宮司 須崎 裕

平成二十九年酉年式年大祭

はじめに、今年八月広島県北部

を襲った土砂災害により多くの方々

が尊い命を奪われ、沢山の家が

流され、今なお不自由な避難生活

を余儀なくされている皆様に心よ

りお見舞い申し上げますと共に、

亡くなられた方々のご冥福をお祈り

申し上げます。

私、この春三月八日に行われま

した神職会において宮司に推薦を

戴きました、須崎 裕でございます。

何分にも浅学非才の身と若くない

年齢でもありまして、この重職を

全うすることが出来るのか逡巡し

ておるところでございます。内心

忸怩たる思いですが、お受け致し

た以上は御嶽大神のご加護の下、

矜持をもって「一意専心」神明に

奉仕させて戴く所存でございます

ので、ご懇篤なるご指導を賜りた

くお願いを申し上げます。

さて就任してすぐにでも取り

組まなければならぬ大きな事

業と致しまして、三年後の平成

二十九年に執り行われます十二年に

一度の酉年式年大祭がございます。

この大祭に併せて長年の雨風によ

り退色著しい幣・拝殿及び向拝の

彩色漆工事を総工費一億一千萬円

にてご奉仕させて戴くことになり

ました。神社と致しましても鋭意

努力を致して参る所存ございま

すが、ご講中、崇敬者各位におか

れましても特段のご協力ご支援を

お願い申し上げます。

また一方でこれからの神社を取

りまく状況も厳しい時代を迎えよ

としております。社家の後継者の

問題をはじめ、講中存続の危機、

高齢化による講員の減少、

また参拝客の落ち込み等

様々な課題を抱えており

ます。

「歧つ者は立たず跨ぐ

者は行かず」の精神で皆

様のご意見を承りながら

出来ることから着実に対応

して参りたいと考えてお

ります。

これからも神社発展の為、微力を

尽くして参りたいと存じますので、

一層のご支援、ご厚情を重ねて

お願い申し上げます。

御岳山はすつかり秋色濃く、満開

の萩の花に秋虫の女王「邯鄲」が

競いあつて素晴らしい鳴き声を響

かせております。間もなく紅葉の

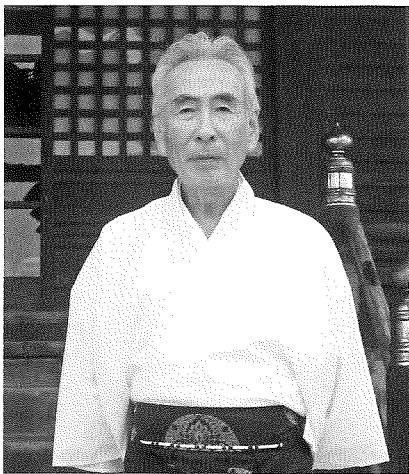
季節を迎えます。大勢の方々のご

参拝を心よりお待ち申し上げます、

宮司就任のご挨拶とさせていただきます。

す。

平成二十六年九月三日



三年後の平成二十九年は、江戸時代より酉年式年大祭と称した、酉年ごとの十二年に一度の大祭が斉行されます。

大祭期間中は「蔵王権現」様に外陣へお出まし頂き、一日二回ご開扉申し上げ、参拝者の皆様にはお近くまでお進みのうえ諸願成就を祈念して頂ける特別な年です。

それに伴い記念事業として、退色著しい向拝を始めとした彩色及び漆工事をご奉仕する事となり、多くの崇敬者の皆様から特段のご支援を賜っているところです。

来年五月頃からは式年大祭に向け、いよいよ向拝等の彩色及び漆工事を始める運びとなりました。工事の期間中参拝者の皆様にはご不便をお掛けいたしますが、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

また、今後も記念事業資金については引き続きお願いをするところでございます。

何卒宜しくご高配賜りますようお願い申し上げます。

上げます。





武州大祭(一万円以上・敬称略)

平成二十六年二月一日〜八月三十一日

金一封

百万円以上

五十万円以上

新座市

三十万円以上

福生市

一十万円以上

板橋区

横濱市

新座市

練馬区

羽村市

川島町

ふじみ野市

中央区

青霞町

五霞町

江戸川区

江戸川区

横濱市

厚木市

厚木市

厚木市

一万円以上

狭山市

川越市

町田市

本庄市 福島清吉  
相模原市 村田崇  
足立区 氣垂の郷経路六治療院  
足立区 佐藤泰  
足立区 氣垂の郷経路六治療院

草加市 藤本留美子  
さいたま市 宮井章  
豊田市 加藤栄子  
江戸川区 加藤栄子  
江戸川区 加藤栄子  
鎌倉市 加藤栄子  
西東京市 加藤栄子

東京島根県人会 会長  
扶桑建設株式会社 星野宗保  
大久保雄二  
小澤恒夫

奥多摩町 小澤恒夫  
新座市 小澤恒夫  
一万円以上 小澤恒夫

所沢市 神山友和  
板橋区 上板橋桜川敬神講  
さいたま市 深井 明  
さいたま市 伊藤美幸  
北本市 清水元美  
皆野町 金子千侍  
練馬区 大泉辛酉講 講元 加藤友久  
武蔵野市 関前講中 講元 小野源一  
あきる野市 高瀬講中 講元 小野源一  
日野市 瀧 柱郎  
武蔵治作酒店 武藤一由  
青霞町 大久保貴惟  
羽村市 相川盛心  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
板橋区 板橋天祖神社 宮司 小林保男  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
三田地区神社総代会 戸井田浩一  
中島昇一  
小早川 明  
鶴馬組屋 横田 登  
デビット・アイラー 山上祐里  
東海林 守  
箕輪治洋

奉納・営繕資金(二万円以上・敬称略)  
平成二十六年二月一日〜八月三十一日

昭島市 東京島根県人会 会長  
扶桑建設株式会社 星野宗保  
大久保雄二  
小澤恒夫

奥多摩町 小澤恒夫  
新座市 小澤恒夫  
一万円以上 小澤恒夫

所沢市 神山友和  
板橋区 上板橋桜川敬神講  
さいたま市 深井 明  
さいたま市 伊藤美幸  
北本市 清水元美  
皆野町 金子千侍  
練馬区 大泉辛酉講 講元 加藤友久  
武蔵野市 関前講中 講元 小野源一  
あきる野市 高瀬講中 講元 小野源一  
日野市 瀧 柱郎  
武蔵治作酒店 武藤一由  
青霞町 大久保貴惟  
羽村市 相川盛心  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
板橋区 板橋天祖神社 宮司 小林保男  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
三田地区神社総代会 戸井田浩一  
中島昇一  
小早川 明  
鶴馬組屋 横田 登  
デビット・アイラー 山上祐里  
東海林 守  
箕輪治洋

奉納・営繕資金(二万円以上・敬称略)  
平成二十六年二月一日〜八月三十一日

昭島市 東京島根県人会 会長  
扶桑建設株式会社 星野宗保  
大久保雄二  
小澤恒夫

奥多摩町 小澤恒夫  
新座市 小澤恒夫  
一万円以上 小澤恒夫

所沢市 神山友和  
板橋区 上板橋桜川敬神講  
さいたま市 深井 明  
さいたま市 伊藤美幸  
北本市 清水元美  
皆野町 金子千侍  
練馬区 大泉辛酉講 講元 加藤友久  
武蔵野市 関前講中 講元 小野源一  
あきる野市 高瀬講中 講元 小野源一  
日野市 瀧 柱郎  
武蔵治作酒店 武藤一由  
青霞町 大久保貴惟  
羽村市 相川盛心  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
板橋区 板橋天祖神社 宮司 小林保男  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
三田地区神社総代会 戸井田浩一  
中島昇一  
小早川 明  
鶴馬組屋 横田 登  
デビット・アイラー 山上祐里  
東海林 守  
箕輪治洋

奉納・営繕資金(二万円以上・敬称略)  
平成二十六年二月一日〜八月三十一日

昭島市 東京島根県人会 会長  
扶桑建設株式会社 星野宗保  
大久保雄二  
小澤恒夫

奥多摩町 小澤恒夫  
新座市 小澤恒夫  
一万円以上 小澤恒夫

所沢市 神山友和  
板橋区 上板橋桜川敬神講  
さいたま市 深井 明  
さいたま市 伊藤美幸  
北本市 清水元美  
皆野町 金子千侍  
練馬区 大泉辛酉講 講元 加藤友久  
武蔵野市 関前講中 講元 小野源一  
あきる野市 高瀬講中 講元 小野源一  
日野市 瀧 柱郎  
武蔵治作酒店 武藤一由  
青霞町 大久保貴惟  
羽村市 相川盛心  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
葛飾区 福島 馨  
板橋区 板橋天祖神社 宮司 小林保男  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
鶴馬組屋 宮司 羽鳥喜美  
三田地区神社総代会 戸井田浩一  
中島昇一  
小早川 明  
鶴馬組屋 横田 登  
デビット・アイラー 山上祐里  
東海林 守  
箕輪治洋

太々神楽奏上者

武州みたけ第三十四号(平成二十一年六月)

以降の太々神楽奏上者を掲載いたします。

近年太々神楽奏上が少なくなっております。

皆様の御奏上をお待ちしております。

(平成二十六年八月三十一日まで)

平成二十一年六月以降

川崎市 市ノ坪講中

青梅市 カンタンをきく会

横濱市都筑区 御岳山観光協会

川崎市中原区 茅ヶ崎講中

川崎市中原区 宮内講中

狭山市 菅井御嶽講中

川崎市 馬絹講中

町田市 町田・多摩小野路講中

川崎市中原区 小杉御嶽講中

立川市 菅生講中

あきる野市 砂川五番組講中

秦野市 秦野太々講中

川崎市中原区 菅生講中

大田区 菅野太々講中

川崎市 六郷参拝講中

川崎市 今井講中

川崎市 松戸御嶽講中

杉並区 浜田山講中

青梅市 カンタンをきく会

御岳山観光協会

平成二十三年一月〜十二月

富士見市 上沢講中

川崎市 馬絹講中

世田谷区 玉川春講中

平成二十四年一月〜十二月  
川崎市 坂戸御嶽講中  
横濱市神奈川區 羽沢御嶽講中  
川崎市 馬絹講中  
所沢市 細山坂東御嶽講中  
練馬区 久米御嶽講中  
狭山市 大泉辛酉講中  
東村山市 秦野太々講中  
秦野市 壹基替講中  
青梅市 秦野太々講中  
飯能市 河辺講中  
松戸市 一丁目永代御嶽講中  
新座市 八軒講中  
大田区 六郷参拝講中  
横濱市神奈川區 菅内南町講中  
府中市 屋敷分御嶽講中  
横濱市港北区 篠原講中  
川崎市 市ノ坪講中  
川崎市 宮内講中  
川越市 砂久保講中  
川越市 砂久保講中  
川越市 カンタンをきく会 御岳山観光協会

平成二十五年一月〜十二月  
川崎市宮前区 野火止聯合講中  
川崎市 中野島講中  
川崎市 秦野太々講中  
川崎市 末長講中  
新座市 貝沼講中  
松戸市 貝沼講中  
松戸市 松戸御嶽講中  
横濱市神奈川區 子安入江講中  
大田区 六郷参拝講中  
川越市 大中居講中  
川越市 藤間伊勢原講中  
川越市 カンタンをきく会 御岳山観光協会  
川崎市 土橋講中

平成二十六年一月〜八月  
川崎市宮前区 馬絹講中  
新座市 中原講中  
川崎市 上之台敬神講  
川越市 小仙波講中  
川越市 小杉御嶽講中  
川崎市中原区 備さながら設備工事  
新座市 秦野太々講中  
飯能市 一丁目永代御嶽講中  
大田区 明治神宮司至誠館  
板橋区 六郷参拝講中  
板橋区 田中為三御一行  
新座市 石神講中

●● 講中を訪ねて ●●

南峯御嶽講

講元 晝間 保雄

父にかわり二十年前から講元を務めさせて頂いております。

講のはじまりは昭和三十年代、県会議員選挙の頃から片柳宮司様にお世話になった事を父から聞いております。

当時は五十数名いた講員も年々減少し、現在は十七名程となつてしまいましたが、御嶽山を崇拜する心は変わらず、美しい大自然を抱くお山に参拝するのを講員は楽しみにしています。

登奈利荘片柳宮司様御一家におかれましては、お孫様に囲まれお世話頂き、これからも末永く続けられることを願つてやみません。



平成26年度 南峯御嶽講代参記念 平成26年4月21日

所在地 埼玉県入間市  
講員数 十七名  
主幹宮司 片柳 光雄

下長洲御嶽講

講元 野村 直

戦後、世の中全ての人々に災いを除き福を求め、所願成就を願ひ、下長洲御嶽講が結構されたそうです。小生は、二十一年前より講元を務めさせて頂いております。現在講員は六十名で、大きな講中として存続している所です。

毎年恒例の参拝は、四月末の日曜日又は祝日に、祈願祭、及び総会をかねて実施しています。参加者は毎回四十名前後で、地元よりバス一台を貸切り、年老いても、女性でも、若手でも、講員にこだわらず、一般の方も参加をし、祈願時は全員に玉串奉奠し参拝する形をとっています。

総会に先だち、主幹宮司及び講員有志による雅楽の演奏により進行し、終了後の直会において和気あいあい楽しく親睦がはかれる、いつか場であると改めて御嶽講の存続を願ひ、続けていきたいと思ひます。

所在地

東京都青梅市

講員数

六十名

主幹宮司

橋本 義明



川越市上戸御嶽講

講元 鈴木 邦夫

上戸御嶽講は、日枝神社の氏子により構成されております。したがって秋の日枝神社の祭礼時に、

籤引きにより代参を決めています。神社本殿は川越市指定文化財になっております。平安時代の豪族・河越氏は、河肥三十三郷を荘園として後白河法皇に寄進し、自らは荘官として経営にあたりました。このため、河越荘内(上戸)に新日吉山王宮(いまひえさんのうぐつ)が勧請されました。

江戸館の主である江戸氏は、河越氏の分かれであることから貞治元年(一一三六二)に江戸館を築いた際、河越氏の氏神様である上戸の新日吉山王宮の分霊社を江戸館の鎮守社として還し祀りました。これが現在の東京赤坂の日枝神社であります。

このような由緒深い日枝神社の氏子でもある上戸御嶽講の人々は、敬神の念が厚く、とくに御嶽山には毎年代参を立て、満講の際には講員全員により太々神楽を奉納しております。

所在地 埼玉県川越市上戸  
講員数 約五十名  
主幹宮司 黒田 忠雄

# 御嶽神社あれこれ

## 「浦安の舞」講習会

十七年前より太々神楽とは別に、神楽舞「浦安の舞」が舞われるようになりました。舞姫は山上の若い女性を対象に、夏に一度「浦安の舞講習会」を開催し、大祭でのご奉仕の他に、練習の成果を発表する場として、薪神楽や一般公開・夜神楽等で舞を披露しています。

「浦安の舞」は、皇紀三千六百年を奉祝して、宮内省式部職楽部楽長 多忠朝氏により作曲・振付されたもので、現在でも代表的な神前神楽として多くの祭典で奉奏され、神慮をお慰め奉っています。

「天地の神にぞ祈る朝なぎの

神のごとくに波たため世を」

昭和天皇の御製で、平和を祈る御歌です。

昨今の国際情勢・度重なる天災など、心安まらぬ報道が後を絶ちません。この御歌のように、心の平穏と世界の平和を祈るばかりです。

## 講習会日記

今年八月十一日～二十二日までの七日間、上級生・下級生に分かれ練習を行いました。参加者は、小学三年生から中学一年生までの八名。元気な女子の、賑やかな講習会となりました。

今年始めて舞台で発表する子もおり、和氣藹々とした楽しさの中にも緊張感が入り交じり、とても良い練習が出来たのではないのでしょうか。

八月十一日



神妙な面持ちで開講奉告祭に参列した上級生3名。(中学1年2名・小学5年1名) 舞の上達を神様に祈ります。これから扇舞・鈴舞を学びます。

八月十二日・十三日



テンポあわせるのむずかしい〜(汗)

薪神楽で舞を披露するため、練習にも熱が入ります。



八月十四日

じつは…おやつ時間が一番の楽しみ(>▽<)!!



それぞれ注意されたところを、自分なりにノートへまとめて復習しています。がんばってますね!!

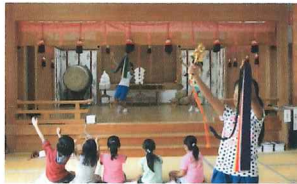
八月十八日

(>.<)…覚えるの大変!!



後半の部。小学3・4年生の5名。始めて2、3年の子供たちです。舞の通りを必死に覚えているところです。昨年に比べ、随分お姉さんになりました。

八月二十日



お姉さん達の舞を見学。今年は発表した〜!とみんな意欲的。さあ何人の子供たちが本番に出られるでしょうか。がんばって!!

八月二十四日



緊張したけどやり切れて良かった!! 次の舞台も成功するぞ!

中学生・小学5年生の2人。一人は今年始めて舞を披露しました。二人とも立派に舞うことが出来ました。

八月二十二日



皆でやる浦安は、やっぱり達成感も魅力。来年もがんばります!

## 今後の予定

### 神楽と雅楽の一般公開

十月十三日(月) 体育の日

神社 神楽殿にて

午前 十一時 開演

### 夜神楽

九月二十八日(日)

十月二十六日(日)

十一月二十三日(日)

神社 神楽殿にて

六月～十一月の第四日曜日 午後八時開演

\* 演目は異なります。

### \* 無料

\* 夜神楽終演後、臨時ケーブルカー有

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ24

# 国宝 円文螺鈿鞍の三懸

日本風俗史学会会員  
前青梅市文化財保護審議会会長 齋藤 慎一

武蔵御嶽神社の旧暦二月八日、暁闇の祭儀に、必ず神馬につけた馬具一式 連銭文の

鎌倉初期十三世紀の古い軍陣鞍で工芸的に優秀で、各部分

「円文螺鈿鞍」には、双鶴文の紋板の「舌長鎧」と「杏葉形宝珠文」の「轡」、紅花染絹撚糸の亀甲組糸の「三懸」(五本綱鞍一式)、鞍の前輪には「鏡鞍」まで附属します。

がこの中の紅花染絹糸製の亀甲文様の「総」つきの「三懸」五本綱鞍について調査します。

「三懸」とは、単に「鞍」ともいい、頭部につける

## 胸懸



制禦のための面懸、胸と後背で鞍を安定させる胸懸と尻懸の三本の細い平たい帯一組です。馬体に直接装備する帯なので、殊に御嶽の馬具のように武家の軍陣鞍様式は痛みやすく、年代を確定できる伝世品は稀なのです。御嶽で神馬を神事に曳く恒例の二月八日の祭儀

は、万治二年(一六五九)の祭礼帳(久保田家文書)で確認できます。祭礼は、更に古く、その際奉納の「納め太刀」の刻銘から中世末の弘治四年(一五五八)以前に遡れます。鞍笠と一揃いの馬具の伝世品としては最古の例です。

ちなみに久能山東照宮には、徳川家康所用という水干鞍と組む総つきの三懸があり、寛文四年(一六六四)帳簿に記載、重要文化財に指定されています。

この三懸は、御嶽と共通の仕立てで注目されます。

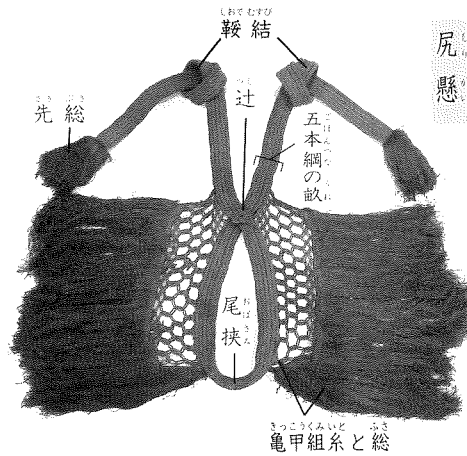
御嶽の三懸は早く知られ、寛政一三年(一八〇一)二月四日、松平定信の命で家臣や画師が登山調査した(片柳三郎家・金井家文書)図が『集古十種』馬具部に収載されます。御嶽の三懸には、紅花染の亀甲組糸に総が装飾としてつく「総鞍」で晴れの盛儀の馬装です。御嶽の神の御召しの神馬につけるため、一年に一

度だけ本殿内陣から取り出す大切な神宝だったので。

一方、文献としては、『吾妻鏡』正嘉二年(一二五八)三月一日の鎌倉將軍宗尊親王初めての二所詣の美々しい行列を飾る「随兵(大鎧に弓矢を帶し騎馬で將軍を守護する名門の武士)十二騎」が「総鞍ヲ懸ク」という記事が中世鎌倉武士が晴儀に総鞍を使用した最古の記録です。十二騎には後に御嶽神社を修理した三田氏の先祖三田小太郎の子息五郎も選ばれています。

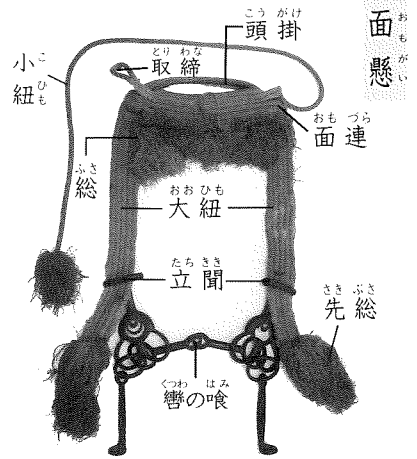
三懸のうち面懸は、長さ22cmの面連を馬の額にあて、頭上の首掛の左右から大紐の帯、先総12cm共で各49cmをたらずその先に手綱と口取の曳く差繩を結び付ける轡を付け、馬の口にはめまます。面連の端の97cmは反対側の取締にかけて引戻し根元で結び面懸を固定します。面連の厚総は丈が10cmです。轡(の鏡板)の立間に通した大紐は先総がひらい

ていて抜けません。享保二二年（一七二七）閏正月一日、吉宗の希望でこの轡を江戸城で上覧に供した時もこの面懸はつけたままであったのです。



cmの帯は各々鞍の後輪の左右の鞍に結ぶ。亀甲組と総は約42cmの垂下で辻の8cm先より尾挟まで飾る。重量870g。御嶽の三懸の帯部分は、四

と共に鞍を安定させます。尻懸は両端の先総各16cm共で全長304cmを二つに折り、尾挟とし尾の根元にかけて、折目は五本綱の帯の綴を解き二本と三本とし、折目より38cmを隔て交叉して辻（組違）とし鮑結に上下の帯の紐を組んで留める。辻から96



鉄製の轡共で面懸の重量は120g。胸懸は全長210cm（先総16cm・取締80cm共）で、馬の前胸にあて、左側の取締は鞍の前輪の左の鞍に掛け右の先総のある方は右の鞍に結びます。帯の中央86cmの間は、長40cm亀甲組その下に20cmの総が縫いつけられて垂下します。重量600g。尻懸

例に比較しても、より小ぶり

御嶽の五本綱鞆は、厚さ0.9cm、幅4.2cmほどの厚手の平細帯で、例えば尾挟とか、辻、頭掛と面連部分での工作に便利のようです。石山本願寺旧記『証如上人日記』天文五年（一五三六）二月二二日に「茜綱しりがい十具」とある。天文・弘治の頃御嶽では神馬の曳き馬供奉の二月八日祭礼が行われていたはずで、その頃までに補充されたのがこの三懸でしょう。殊に御嶽の三懸は近世の遺

つ打（唐打）の丸い木綿芯の組紐（綱）五本を横に綴じて、平組の五本畝に見立てた五本の綱鞆です。平組で畝や菱文を組出す中世の仕様に対して、近世には綱鞆が主流となりま

氏制作の復元の馬装図を参考にして頂きたいと思えます。

調査執筆にあたって、西岡文夫氏と古馬術の菅野茂雄氏の学恩を頂いた。馬具の説明は難解なので、御嶽神社宝物殿展示中の実物と、神田忠良

な仕立です。久能山の家康所用の三懸も小ぶりで、ほぼ御嶽と同一の寸法です。ごく小さな古風な中世の馬の装具であったと思います。一年一度、「（御嶽）権現御召」し鞍（黒田家文書・享保五年神宝目録）として神事に供奉するのみなので、保存良好、平成五年の小補修だけです。實用のきびしい使用事情から、中世の糸組の三懸の残る例は皆無です。まして近世初頭に下っても年代想定可能な遺例は稀なのです。御嶽の円文螺鈿鞍附属の、紅花染五本綱鞆は、中世末の制作ではあっても、鞍・鐙と一組で中世の馬装の実際を伝えている貴重な存在です。

神社の杜(四十三)

御岳ビジターセンター 片柳 茂生

今年の梅雨に異変あり？

セミといえば夏を思い起こさせる生き物ですが、実は春から発生が始まっています。五月の連休を過ぎた頃にまずハルゼミが鳴き出します。

声はムーゼー・ムーゼーとちよつと低い声であり蝉らしくありません。針葉樹林を好むように御岳山では樅や栂の木が林立する富士峰園地でよくその声を聴きます。その後エゾハルゼミが出てくるのですが、その声は一風変わっていて、ミヨウキン・ミヨウキン・ケケケケケと全く蝉らしくありません。こちらはハルゼミと違って広葉樹林を好み、神社の杜は格好の住処のようです。



今年、このエゾハルゼミがちよつと変だつたのです。

梅雨の時期御岳山は、濃い霧に包まれる日が多くあります。平地では曇りでも山の上は霧の中、そんな日が多いのです。梅雨の晴れ間はもちろんのこと、霧がはれ、ちよつと薄日が差し始めた時など、その時を待っていたかのようにエゾハルゼミは鳴き出します。鳴き出しのきつかけを一匹がつくると、他のエゾハルゼミもそれに応えるように一斉にミヨウキン・ミヨウキン・ケケケケ・・・と輪唱が始まります。その合唱は森全体に響き、野鳥の声などかき消されてしまうくらい大きなものになります。セミは雄しか鳴きません。この鳴き声は、雌へのラブコールなのです。この時期を逃すまいと雄たちが声高らかに鳴き競っているようです。

と、ここまでは例年のことですが、今年はどうも様子が変です。梅雨の晴れ間のある日、エゾハルゼミの合唱がいつもの年に比べて五月蝭くない

ことに気づきました。雨の日が多くて鳴く機会が少なかったのか、あるいは幼虫から選んだ成虫の発生数が少なかったために大合唱が聴かれなかったのか、それとも晴れている日が少ないのか解説員の頭を悩ませてくれる出来事でした。

アメリカには、十七年ゼミと言うセミがいます。土の中で暮らす幼虫の期間が十七年とものすごく長生き？するセミです。しかも普段年は、全くと言って良いほど見かけることがないのに、十七年に一度街中蝉だらけになるほど大発生すると言われています。

皆さんご存じのアブラゼミは、幼虫期間が七年であるのに対し、エゾハルゼミのそれは長く十五年と言われています。しかしこれはまだ実際には確認できていません。もしこれが事実であれば、十五年後の二〇二九年は静かな梅雨になるはず

です。今年、異常気象の影響でたまたま少なかったのか、それとも十五年という周期で発生数が少ないのか。十五年後、もし皆さんが覚えていたらぜひ確かめて下さい。ひよつとしたら大発見になるかもしれませんよ。

表紙写真 鈴木新吾 「新神楽・天の岩戸」

天字受賣命が舞を神々が楽しむ声を聞き、天照大神は姿を現し世界は明るくなりました。現代においても皆様の楽しむ声が明るい世の中を造る原動力となることでしょう。

過日、参拜の方に神様の存在についてお尋ねになる方がいらつしました。確かに都会での生活の中では、自然そのものである神様の存在を感じる機会は少ないのかもしれませんが、只、心の中に神様がらつしやるか否かで、感性は一変します。感謝する気持ちが生まれ、穏やかで暖かい気持ちとなります。苦しいときは、耐え忍び、新しい一歩を踏み出す勇氣が生まれます。

自然が持つ恵みや試練、それは神様そのものであり、あなた自身の歩む道でもあります。南峯御嶽講 書問様、下長瀨御嶽講 野村様、川越市 上御嶽講 鈴木様、齋藤愼一先生、ビジターセンター 片柳様には玉稿をありがとうございます。

平成二十六年九月二十九日発行  
 (年一回発行・非売品)  
 編集 武蔵御嶽神社

TEL (0476) 781-8500  
 FAX (0476) 781-9741  
<http://www.musashimikakejin.jp/>  
 印刷 (株)成和印刷